

平成3年度制作報告

民間放送教育協会プロデューサー 井出 定利

1. 実施報告書から —— 機は熟成した

今年度の実施報告には次のような所見が報告されている。

- ◎……………講師はまずテキストの執筆に全力をあげ粗稿が出来た段階からはテレビ局スタッフにそれを参考にしながら自由に番組構想を立ててもらうことにした。特に番組作りに関しては担当ディレクターの創意やアイデアを尊重して、各講師はそれに協力する形でいわゆる講義番組にならぬことを確認しあった。テキストでは自然科学書としての内容を、テレビでは科学番組としての面白さを、という我々の狙いはどうやら達成された。 ………約1年半前に（放送）案が採決された。（北大・石城先生）
- ◎……………方針の具体化は、学術研究の成果を教授する大学講師とテレビ番組化する制作スタッフという2グループの専門集団が、納得のいくまで話し合うことで成立すると言える。（北海道放送・吉田氏）
- ◎……………例年、制作者が乗り越えねばならないハードルの一つに、テキストを中心に“映像”をなぞる姿勢がある。その点では各講師がテレビ番組という考え方に立って進めていただいた。（同・松下氏）
- ◎……………テレビというメディアにおける映像と音声の関係は重要かつ微妙である。講座番組においては、映像力は《感性的》に使われるよりも、《論理的・説明的》に使用されることが多い。このため《論理的・説明的》映像は、ある程度時間をとって示す必要がある。適確な時間長があって、受講生はその事項を確認し、自ら反芻し、理解に至るものと思うのである。受講生の集中力、理解の度合い、番組構成などさまざまな問題での議論が続けられ、30分番組、45分番組の試行が行われていると思うが、この点についての議論をさらに深める必要があると改めて感じた次第である。（東北放送・近田氏）
- ◎……………講師は学問内容について責任を持つものであり、放送をめぐるさまざまな表現技術は制作部門のスタッフの方が遥かに通曉している。ディレクターに実のあるイニシアティブを与えて欲しい。（新潟大・井山先生）
- ◎……………放送公開講座も実験の段階から総括の時期にさしかかっているという認識も踏まえて、大学と放送局の思い切った融合、全ての作業に双方が緊密に関わりあうという発想が浮上した。（新潟放送・鷲頭氏）
- ◎……………内容の充実度は、いかに早く番組制作にとりかかれるかにかかわっている。何人かの講師から、放送局と大学が対等の立場で遠慮せずに講師もスタッフの一人としてみて欲しいとの要望も出された。（北陸放送・高桑氏）
- ◎……………全学部を一巡した現在、琉球大学と沖縄テレビに課せられた責任の重要性を痛感。（沖縄テレビ・山口氏）

私はこれらの発表文につけ加える何ものもない。

大学と放送局の双方から、おのおの役割の確認と協力関係のメッセージがこれほど各所で見られる報告書は初めてではないだろうか。これらの所見を見ると、公開講座も様々な問題をかかえながらも機は熟成して、今年度あたりから次の段階に脱皮しつつあることを予感する。

ただその一方で、四国地区と沖縄のラジオ局から大学との協力関係が要望されている。四国地区は来年度で、全県を一巡する。この際是非、四県の放送局と大学側との共同会議を設定していただき、経験の蓄積と継承に意を用いて下さることをお願いしたい。例えば今年度も西日本放送の国宗さんが、出演講師が多すぎることを指摘している。これは四国地区から毎年でている問題であり、この一つを解決するためにも放送局側からの共同の場づくりの提案をお願いしたい。

琉球放送の大宜見さんは、“放送講座の担当学部や内容が大学側のみで決定されるのではなく、今後は放送局側の意見もとり入れてラジオ講座が大いに活用されることを希望”している。沖縄のラジオ講座は今年度、来年度と自然科学系のテーマが設定されている。ラジオに自然科学は向かないとは言えないが、テーマ設定や内容のグランド・デザインにはメディア特性への大きな配慮がなされないと一般の人々の支持を失うことにもなりかねない。

その他、北大と信州大の先生から広報活動の不足が指摘されている。北大の阿部先生はいう。放送講座は意外に知られていない。地域社会に知ってもらうためには新聞広告などは最も効果的であると…………。

又、大学の担当講師の負担が大であることも何人かの先生からだされている。講座番組は局側も先生方に頼ることが大で、心苦しいところも多々ある。大学側の措置によって関係講師の負担が少しでも軽くできるならば、大変うれしいことである。

2. 番組から

今年度の番組は全体としてレベルが高く、各地区で反響も大きかったとのこと。この点でも公開講座が一つのレベルに到達しつつあることを感じさせる。

〈ラジオ〉

「ことばはいきている」(大阪) 講座にはめずらしく出演者の笑いをとりながら進めている。

「道の文化」(四国-香川) 「科学者と故郷・風土」(新潟)

ドラマ形式で内容を親しみやすく、わかりやすく進めている努力。(結果の良し悪しは別として)

「ラフカディオ・ハーンと熊本」(熊本) 内容があり今年度の収穫といえよう。ブレイク・タイムのハーンの名文を英語で朗読したこともよかったと思う。

「乱れの物理学」 言葉の表現に先生方も大変苦心し、ディレクターも内容に追いつくべく凄い努力をしたようである。思ったよりもわかりやすく物理学をラジオでやる試みとしては成果と言えるが、やはり損をしている印象はぬぐえない。

「身近な政治」(北海道) 法や政治は内容が厚く、大変勉強になるが、どの局の場合でも損をしているという感想をもつ。つまり、いまいち番組としての盛りあがり欠けるところがあ

る。今後の課題を残している。

〈テレビ〉

「大いなる島」(北海道) 先生方と局の熱意のほどが伝わってくるいい番組となった。今年度の収穫といえよう。

「良寛の書と生涯」(新潟) 30分という内容の運びが悠々としたテンポでうまい。講座と番組としての調和がとれ、これも今年度の収穫番組といえよう。岡部政明のナレーションも効いている。

「情報と人間」(名古屋) 昆虫の生態撮影が秀逸。

「変わる?人間の科学」(大阪) 講師を椅子にすわらせただけのスタジオ処理が面白かった。

「がんへの挑戦」(四国-香川) 構成上の美術セットの工夫として、イントロから本編への移行の時に講師が場所を移動する間とスタジオの奥行きの出し方がよかったと思う。講座番組ではスタジオでの奥行きのあるショットが少ないため、ちょっとした工夫であるが、印象に残る。

「琉球舞踊の世界」(沖縄) タイ、インドネシアまでロケし、制作費をオーバーしての努力と企画の面白さもあいまって反響の大きい講座番組となった。

尚、熊本放送「計測と制御」では13回の放送終了後、視聴者の質問と理解を補う意味で、もう1回30分の番組を自主放送したとのこと。大学と放送局に心から感謝する次第です。

大学放送講座も10年以上たって、とにかく大学と局側の協力関係ということの問題にすることはもう卒業できれば幸いと思う。次はラジオやテレビで大学教育を進めて行くにはどうしたらいいのか——メディアの力を活かして行く方法論が今までの経験をふまえて確立されて行くことを期待したい。